

嘉瀬モッチョ

秋元 惣之進

人体の盲腸は、小腸と大腸の接続部分にあり、盲腸の先端の、小さな袋状の虫垂に起る炎症が盲腸炎であり、盲腸は、人体に有利性が無く寧ろ邪魔物の一つで、盲腸があると何時、炎症が起るか先が案じられ心配である。炎症が起ると、腹部を切開手術で、盲腸を取り除かなければならないから厄介物の一つである。

嘉瀬「モッチョ」の人々も、有利性が無いのに、対人関係に、いらぬ厄介や、一つの物にも自分では出来もしないのに文句を付け、阻止しようと企てたり。部落民や、隣近所の人々を拒み、悪口雑言を世間に振撒いたりするから、明治末期から、他町村の人々は、人体の盲腸を意味して名付けたのが、嘉瀬「モッチョ」であると言うが、結果的には、浅才で本能を抑え切れず、理性に従えないのが、今迄の一般的な嘉瀬「モッチョ」の人々であったと言う。

近年まで、嘉瀬の古老間で盛んに使われたと言う嘉瀬言葉

『嘉瀬モッチョ』と言う方言がありました。

モッチョとは、嘉瀬独得の言葉でしょうか、また、何を意味する言葉か、その源流をさぐると共に、言葉の起因と成立過程を調査のうえ、あなたなりの自由な発想のもとに、言葉の解釈を回答して下さい。

① 隣の家で僅少生活が楽になると憎らしい。拒みか妬みか知らないが、すぐ感情的になり、自分には経済的力が無いのも自覚せず、隣家の足を引っぱり「粗」を拾い、あれだもの隣家で生活が楽くなるのは当たり前だよ、寸分の暇も無く働き、粗喰で、隣近所の交際も少く、欲で、辛抱で辛抱で、あれでお金が溜って儲けないと不思議だよと拒みがちに世間に言いふらして歩く、知らない世間では噂を鵜呑みにして真に受ける。

又、不孝にも貧困生活をしると。彼処の誰はあれだもの貧乏するのは当たり前だよと、侮どり（見下る）笑うのが世間である。良きに付け悪しきに付け足を引っぱり。蔭で噂をして笑うのが嘉瀬「モッチョ」の特徴である。

『人の噂を言うは鴨の味』 『口は災いの元』

② 村の某氏が、地域社会に於て名前が売れたり、一定の地位に着くと、村民は「うん、あれか」と、名前を呼び捨てに言い、あれは幼少の頃

木村 治利

はと、短所や弱点を引っぱり出し、世間に放言して、出世街道と才能を阻止しようとして来たのが、嘉瀬の部落民の心理であったと言うが、伸びる（出世）芽は僅少の欠陥があっても伸ばすべきで、人々の「粗」や悪口を言うと思へば、神様でも、知識人でも、堅実な人でも、欠陥を言うに良い。人を欠なすべきで無いと思うが、人の「粗」を拾い足を引っぱるのが嘉瀬「モッチョ」だったと言う。

『人の粗を拾う前に自分の粗を拾い』

『人を呪かば穴二ツ』

③ 共同施工・共同作業するにも、関係者と事前に協議して、役員を選任し、役員の中から委員長・組合長を決め、事業や作業に取掛かるが、あれが委員長だから、組合長だから、役員だから、事業の内容が好きで無いから、又、あれが委員長、組合長だから、工事や施工しても、業者からリベートを貰うのではないか、又、金銭を着服するのでは無いかと疑い、蔭で根拠も無い憶測を世間に放言して歩き、相談が中々、纏まらず噂があかない。一つの共同施工や、共同作業をするにも、委員長・組合長・役員達は人知れぬ精神的な苦勞をしておるのに、数回も寄合（相談会）が行なわれるが、最後には事業や共同作業を壊す考えで居るが、諄い人や文句を言う人々に限って、実力や手腕が無く、反対意見をするのが嘉瀬「モッチョ」であると言う。

他町村の人々は、嘉瀬では何をやるにも、嘉瀬「モッチョ」があるから難かしいと、蔭で冷笑をしておったと言う。

『無くても七癖』

『千両の馬にも疵がある』

嘉瀬に生れ、育っただけに私も「嘉瀬モッチョ」を話し、聞いたことがある。

しかし、ツガル弁は今でも十分通用しているが「嘉瀬モッチョ」は最近聞かれなくなった。ツガル語なのか、擬態語なのか、その語源は不明である。

日本語の語源すら、諸説ぶんどんで、実はまだ分っていないのが実状であろう。

ツガル語は、ほとんど漢字を用いられていない、とくに当て字が多く用いられるために語源説も続出するのも知れない。

こどもの頃、鏡台の前で、母や姉の白粉や口紅を塗り、遊んでいた妹が「このワラシ、なにモッチョつくてらば」と母親に叱られていたことがあった。モッチョつくりとは、いたづらすることか、とも考いたりした。

他町村の人が、嘉瀬の村人を指しての「嘉瀬モッチョ」は、モッチョつくりとはニュアンスを異にする。

『モッチョ』と『モチヨ』は同語でないのかも知れない。

モチヨの類語に、モチヨガスとモチヨクチエのツガル語がある。ツガル語の謎によると、モチヨガスは、くすぐること、モチヨはくすぐる様で、これは（面著）である。モチヨは擬態語ではない。面著は「いちぢるしく面白い」の意。ガスは（賀す）で「喜ばせる」の意。面著賀すは「いちぢるしく面白く、喜ばすの意で、くすぐるに集約される。

モチヨクチエは、くすぐったいの意。モチヨは、前項の面著でクチエは（苦致え）で「苦しみの致り」の意。面著苦致えは、おもしろ過ぎて

苦しいの意である。

嘉瀬では、モチヨガスことをコチヨガスともいう。くすぐる様を、コチヨ、コチヨといったものだ。

このように、モチヨはくすぐるように面白い意で、憎悪を表現するツガル語ではないが、モチヨには、モチケも含まれるのではないのか、モチケは、おせっかいやき、少し頭の鈍い人の意である。

嘉瀬モチヨは、嘉瀬裳踏ではないのか、裳は昔、女子が腰から下にまとった衣(したはかま)であり、踏は、くすぐずすることである。なにをやらせても、ちららんぼらんな事をやって、くすぐずしているという、嘉瀬の村人を揶揄したコトバではなかったのか。

山中正津

人間の身体に「盲腸(大腸の始まりの部分で、下端にヒモ状の虫様突起のこと)」がある。医学的には、あっても、なくてもよいものだとされている。

盲腸(もうちょう)を嘉瀬言葉で言えば「モチヨ」である。そして更に言えば、津軽のモチケさ輪をかけたモチケな者(何かにつけてモチワラ着たがる奴)、は「モチヨ」になり易い。

私たちの子供の頃、大人たちの意に反した行動をした時、「この、モチヨつくりこのノ。」と怒鳴られたものである。

やらなくてもいい事をやる。必要ないことをする。無くてもよい虫様突起、即ち盲腸。これが嘉瀬の「モチヨ」の語源と考えたらどうか。

と、というような事を考えるのも矢張嘉瀬モチヨの一人かも知れない。

と理解する。

となると、結論づければ、他町村の人から見ると、嘉瀬人は、『軽薄』の野藩人と指差した、侮辱した言葉の一つとして残ったものと訳す。

なお、『嘉瀬蛙』^{モチケ}と言う言葉もある。この言葉も、『嘉瀬モチヨ』と同類語であろう。

沢田 薫

嘉瀬モチヨ、たとえば、その嘉瀬を除いて、唯津軽言葉訛りとして、モチヨだけを独立させて考えて見たが、どうもその語言が浮かび出てこない。モチヨ、一モチケ(蛙はどうだろうか、モチケが尚訛ってモチヨになる可能性はあるか、しかしモチケそのものも津軽の言葉であるし、モチヨ、又は嘉瀬モチヨと特別撃がる因子が見つからない。モチケとモチヨの因果関係は無いものとして×とした。

モチヨから言ってモチケ、はどうだろうかモチケ(チャカシ、軽はずみ、軽率、茶目っ気も入るかも知れない)モチケ、尚訛ってモチヨ、嘉瀬人である私も入れて、嘉瀬人らしい、又津軽人らしい短所が彷彿される。と言う事は又も「嘉瀬十年」などと、嘉瀬を卑しめた言葉となるのだろうか、やりきれない気持となる。しかし、それは嘉瀬ばかりでなく、津軽全般に通用する事でもある。故にそれは嘉瀬は津軽の本場だからと、私なりに溜飲をさげたいんだが………。

ここに又違った意味の言葉が出てくる。親が子供を叱るとき「このモチヨつくりこの」である。皆さんもこの言葉は聞いた事があると思う。

木立久二

嘉瀬人を決って褒めた言葉でないことはたしかだ。

嘉瀬でよく聞かれる言葉に、『盲腸つぐり』がある。腸閉塞を起し、不時に時を選らばず、痛みがとれると本人はケロッとしている状態で、この病気持ちの人を、『アレア、盲腸つぐりですわね』と言ったものだそう。表題の『嘉瀬モチヨ』の因子も、この『盲腸』からきたものとは私は解することにする。

その『モチヨ』とは、嘉瀬人の行動状態を差したものでなかったかと推考する。例えば、とかく嘉瀬人は『空威張る』『強情っ張り』『出斜張り』『物知らず』『知った振り』『法螺吹き』の代名詞とされてきたが、本来の嘉瀬人は、楽天下ぞろいの語駄句作りの名人、好人物で人に乗せられやすい者が多かったのではないかと。言うことに解釈してみると、この言葉の出たところは、嘉瀬人の中から言われてきた言葉でなく、他町村から見た、嘉瀬人への総合的な人物評であろう。

現在の嘉瀬人は、都会への流出交流も行なわれ、その生活風習も、何等都会人と変らなくなったが、藩政明治期は、津軽藩青森県から一歩も出たこともなく、汽車さい見ることなく薨去していった人々が多かったと聞く。

閉鎖された生活の中で、駄法螺に憂さ晴らし、放談に胸をなで下しすることしか、でき得なかった、封建時代の遺風として残された言葉、それが『嘉瀬モチヨ』でなかったか。

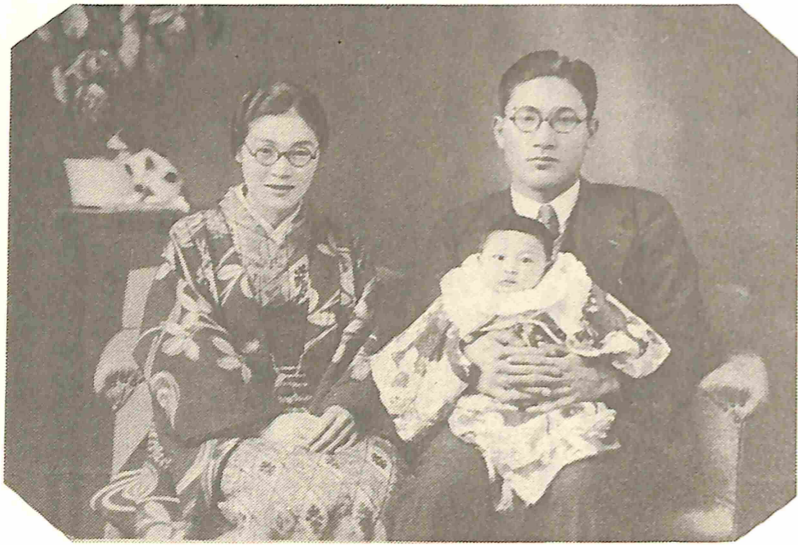
なぞ掛けになるが、『嘉瀬モチヨ』とは、知ったかぶり、何事も口をはさんでくる者、そして結末を付けない、逃げ手の責任の無い者

さて「このモチヨつぐり」とは、親が思い余って子供を叱る言葉であり、前述の軽はずみな事ではなく、私流に考えれば、親の言う事を素直に聞かない、ゴンボホリ(反抗心)などの意味だと解釈する。そうなる、前述のモチケの意味と全然相反する事となる。

だから津軽の言葉は、短かい言葉で意味が深く、カチャマシくなる。と言うことで私の結論は、軽はずみな事と、自我を通して反抗する事とミックスさせた言葉が、モチヨ、嘉瀬が頭に付いて、嘉瀬モチヨである。だからジョッパリだけは違うのである。

しかし、これ最後の本文。古町のある物知りを自称している人に、嘉瀬モチヨの意味について聞いてみたところ、彼即座にいわず、嘉瀬モチヨとは、東奥日報夕刊の世相川柳に掲載された、お前の川柳が一番言え当てていないか——と言ったものである。しからばと、早速何百句もある東奥日報に掲載された私の世相川柳を出してきて、一句一句読みあげて彼にその句を確かめてもらう事となった。何句目かで、『決ってから物知りが来てまたこじれ、かおる』。この句を読みあげた途端、

『それ、それ、この句が、簡潔明細に嘉瀬モチヨを言っている言葉だ。この川柳からあと何も言わなくても、嘉瀬モチヨの心髓が出ていないか。』と言う事であった。なるほどと私も納得した次第だが、果して……と疑問をもった事が、ジョッパリとなるか、モチヨとなるのか、やれやれ、紙上討論、嘉瀬モチヨ、下手なりでも責任を果して、サッパリ、ししたじや。



＜故増田千代吉さん、妻キクさん、長女竜子ちゃん＞
— 昭和 13 年 —

その実績と生涯

増田千代吉の肖像

原田 万治

モッチョの語源の由来は私の調べた範囲では定かでないが、モッチョつくりという言葉は、嘉瀬特有の語ではなく津軽全域にわたり方々で使用されたと思いますが、嘉瀬モッチョとなれば特異な存在の方言で、主に嘉瀬本村以外の町村から侮辱を込めた視点で捉へた言葉であった。モッチョつくりを私の村（部落）では略してモッチョづくりと言いましたが、その内容は普通の人とは違った変則的な行動、ないしは言動、また変った創り物をして一般化されないまま埋没し、それでも懲りずに新たな効率性のあるもの、並びに生活の簡便化をはかりますが、世に普遍化されないと同時に本人自身も利用し得ない状態をさせているようである。

津軽弁でチョのつく言葉はモッチョのほか代表的なものは「カッチョ」（防風雪囲）、「モッチョコチャエ」（くすぐったい）「チョチョジ」（おしゃべり）と数少ないが、特に「カッチョ」は十三村の七不思議の一つに数えられるほど有名ですが、古代における「カッチョ」の意味は（越冬）で人が屋内で冬ごもりしていることをさしている。ところで「モッチョ」の語は物の名称である固有語ではないが、私なりの偏見でみた語源は中世の元寇の戦いの名残りにとどめたい。ご承知のように元寇の戦いは、文永（一二七四）の役と弘安（一二八一）の役の前後二度の蒙古軍の侵攻をさしているのだが、後の弘安の役には私達の祖先である安東水軍も戦略に参加したが、大暴風雨のため、敵味方とも船団は海の藻屑と化した。安東水軍においては第一線級の戦力をほとんど失いその後の水軍の再建は容易でなかったという。満を持して攻撃戦に入った蒙古軍、それを迎え撃つ安東、村上水軍、共に目的を達し得ないまま無為に終わったことは対して津軽のモッチョづくりと非常に似ている。

つまり、蒙古が（モッコ）になり、更に（モッチョ）に訛音化したのではないかと思う。ただ津軽の揺籃の詩に「泣げば山がらモッコ来るね、々」と歌われたモッコは二説あって、ひとつは古代に於ける山の神

をモッコと呼称したこと、今ひとつは蒙古の来襲にちなんだ「モッコ」である。

信仰による山の神のモッコは当時未開の社会では絶体神で、山による恩恵で人間を助けるが、蒙古のモッコは殺るか、殺られるかの二つにひとつで怖いものの代名詞にあずかったのではないだろうか。

揺籃の詩のモッコの意味は山の神の呼称のモッコが自然であるようですが、いろいろな語部のなから私は蒙古のモッコを選択したのである。

「モッコ」のことが本題でないでこの辺でおくことにしても「モッコ」から「モッチョ」という言葉に移行したとすれば何かロマンがあつて実に楽しさを感じるのである。

モッチョつくりと言われて不思議なことに成功した例は寡聞にして聞いたことがない。成功しないからこそモッチョつくりと言ったのかも知れない。

嘉瀬モッチョはひと味違うモッチョだから捻れた人達が、捻れた行動、ないしは物を工作創り出したことでしょうが、創造のことはともかく、行動そのものが特異な現象であつたからこそ総じて嘉瀬モッチョとなつたのではないかと思う。

それも個人の世界よりも集団的な要素が大きく作用し、同じ村内でも強者が弱者をかばうことなく、むしろモッチョつくりを何時迄もモッチョつくりの地位に縛りつけようとしたからこそ他町村から冷笑されたのだらう。

たとえば大きな事件としては郷蔵事件がある。行動そのものは、正邪、貧富、暴力、殺力と極限の綱引の争奪になつたろうが、終末は底辺にある弱者が敗北の運命を背負わされるわけで、結果的にはねずれた人ではないのだが、捻れた人達に置替えさせられ、嘉瀬モッチョ人と押されるのである。

今は嘉瀬モッチョもいろいろな経験を積重ね、自我意識の高揚とともに歴史の片隅に消えてしまったのである。

正義の光を築いた人

増田千代吉氏

吉崎 正光

増田千代吉はどこに居る、増田を出せ、と小山内慢遊、神島豊五郎、黒川由吉の三人が私の家にドヤドヤと靴のまんま入って来た。

私の家で増田千代吉村長当選祝をやつてまだ一〇人位残っていた夜のできごと。

電灯は棒でからまれこわされてしまった。神島豊五郎は私に短刀のようなものをつきつけて増田を出せ、と迫る。

誰かが慢遊と黒川に叩かれた、すかさず窓から数人が飛び逃げた、暴漢がやつつて来た、と中元貞雄宅と増田宅に連絡した。

少しの間もみ合った後、黒川と神島が私を両方から腕かかえし、増田の家に案内せ、と引きづり出して歩いた。

慢遊は途中垣根から六尺ぐらゐの棒をむしり取って、仁王が歩くように、これから共産党村長に天誅にゆくとか何んとか唱えながらのっしのっし歩く。

吉崎年一の門口にくると立止り、「年一」をも連れて行こう、と神島が年一の家に入ってゆく、黒川は私を掴んでいる。

「年一」は出てこない、又二人が私を両方から掴んで増田の門口までゆく。

戸をガラッと開いて慢遊が棒をガチンと立て、共産党の赤い村長は許

されない、天の命により撲滅する、とか何んとか大声で宣言をした。

そして私を放し黒川と神島が勇然と中に入ってしまった。放された私はすぐその場を離れ、丸太まきの影にかくれ、様子を見守った。

狭い家の中で電灯はこわされ格闘がはじまった。増田出る、と奥室の戸を開けた神島、なんだ話せば解る、と出て来た増田、増田は六尺二寸の大男、神島も大差ない大男、問答なし、神島は増田の頬をいきなりなぐった。

増田の弟千代治、相撲取りで力持ち、神島を直にねち伏せる。暗がりから黒装束でスーツと入った吉崎豊常、カンパツを入れず神島に馬乗りになり鉄の薪割りで頭を思いっ切りメッタ打ち、血しぶきが一面に走り散り神島は一瞬にして半死状態となる。

中で待っていた中元、これも相撲も取りケンカも強い、ヤシ数人と対戦しても負けない勇猛力持ち、黒川が中へ入るや否や、ぶん投げ叩きつける、黒川は形勢悪しと直感したかすぐその場から逃げる。

外で待っていた若者達数人が、つるはしの柄やスコップ等で、「この野郎なにしに来た」と、ところかまわずメッタ打ち

小山内慢遊は腕を折られてしまった。

ついて来た二人、オラ達は止めに来たんだ、と言っていたが、暗やみで誰だかわからぬ戦い、その人達も半殺しに合った。

年一の家に入ったとき神島は流し場から出刃庖丁（はきりばち）を持ち出そうとした。豊常はそれは持ってゆくな、と取ろうとしたら神島はムリに取ろうとしたので豊常は手を切られた。

豊常は非常に怒って、薪割をもって後をつけて来た。そして一行が増

年四月五日の夜のことだった。

増田千代吉は四票差で勝利したのだった。

青森県で二人の赤い村長誕生、嘉瀬村の増田千代吉氏、新城村の中村勲氏、当時の日本では、しかも農村でのこと、極めて珍異な社会段面として全国に報道されたことは勿論だが、ソビエトの開放新聞にも大きく報道され、まだ日本の捕虜抑留者が帰国していない時代だから彼等に大きな励ましを与えた。

ところがこの選挙戦、毘沙門投票所で投票用紙交付数より、実投票数が四票不足なので交付数と合わなければならぬものと思ひ、

(当時は選挙認識が馴れていないこともあっていまの時代のように持ち帰りなど選挙記録に書けなかった。)選挙長が投票立会人の合議の上白票四枚入れて開票結果を作成したとのこと。

それが選挙無効の異議が申立てられ、県選挙管理委員会は無効と裁決した。増田側は、訴訟するかどうか、について考究したが、県の裁決に応じ再選挙に従った。

同年九月五日・二回目の選挙では三百数十票離して増田が圧倒的勝利を飾った。

選挙運動は各部落、町内毎につくられている農民組合単位に幹部の家で座談的演説会をくまなく行った。

その中でどこでもよく聞かれるのは、民主主義ってなんのことか、又具体的とはどんなことか、とよく聞かれた。

増田は、戦前は正しいことを歪められて教えられている大衆に、正しい理論、これからの社会の方向、いまは何をどうしなければならぬか、についてよく解り易く説明した。

田の家へ入ったあとネズミこのようにもぐりこみ神島がねち伏せらるや否やカンパツを入れず馬のりになってメッタ打ちしたもの、普段は優しいような豊常、どこからあんな勇猛さが出るのだろうか、と私はむしろ不思議さを感じた。

小山内慢遊は、追いまくられながら「今日の戦は負けた、俺の腕が折れてしまった」と降参を宣言する。

私は暗闇でのうっかり巻き込まれては、と思ひ少し離れた丸太巻きの上から見守っていた。

戦いは終わった。慢遊は折られた片方の腕をプランと下げ、頭を割られ半死の神島を助けに来た、黒川もどこから戻ったか、神島を助けに来た。二人で神島を両方から担ぐようにして帰路についた。

小山内慢遊は歩きながら、「今日の戦いは負けた、小山内慢遊この通り腕が折れてしまったが元氣だ、我等は負けて引き上げてゆくが……何とかかんとか」先刻の出来事と自分の考えをまぜた文句を、ジョンガラ節にして唄いながら引き上げて行った。長富部落では、この襲撃の報を聞いて迎撃動員体制をとったが、それまでには至らなかった。

敗戦前は暴力団は勝手に徒党を組んで左翼主義者に襲いかかったものだ、それでも警察は暴力団を取締まらず、逆に左翼主義者を逮捕したものだ。

村の知識人Kは私に、黒川由吉は暴力団の親分だ、二百人も子分を持つている必ず仕返しに来る。何十人も子分が来て仕返し戦を行えば村は混乱する。そう言う動機をつくる者とは仲間になれない、と話し、その後彼からそれらに関する断絶状をもらった。

この事件は山中勝雄と一騎打、敗戦後初めての村長公選、昭和二十二

まさに増田の説くことは、いままでも軍部、地主や警察に押しこめられちぢこまってしまったっている農民に対して、天照大神が岩谷戸から出た神話のような光明を与え、幅広い世界観と身をばっばっている鎖をすべてはずして真の自由を勝ちとる将来への展望を与えるものだった。

村は地主側対小作側。旧体護持側と新体開発側の大きく分けて二つの対立、敵味方はかなり明らかであり、したがって選挙闘争における闘いの争点もわかり易く選挙運動においても今日のように複雑さは少くもって単純な時代であったと思われる。

選挙場から「当選したぢや」、と知らせが来た、当選祝いの準備もなにもしていなかった。増田自身だって地主側が圧倒的な勢力と支配力を持つて来た歴史的流れの中で殆ど無一文で戦った選挙戦で当選する、と思っていなかったかも知れない。

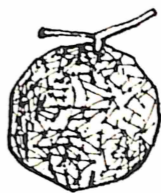
「当選したからには何か、しるしを、つけねばまいねな、吉崎、君の家を貸してくれんか」とぼそり言った。

私「汚なくてもよかったらいいよ」とすぐ家に帰って、家族のものと近隣から人を借りてすぐ全戸を開いて片づけるように指示した。そして各農民組合支部に当選祝を私の家でやるから酒と魚を持参の上集るよう連絡した。当時電話が各家にない時代だからすべて誰かが自転車で行くしかかった。

人々は酒、スルメ、干たら等持って集った。私の家に一杯なるほど百人位だったと思う。酒と言っても清酒は一杯もないみんな手作り酒、米のフカシが一杯でシャクシで汲んで呑む酒、酔のようなすっぱい酒、いろんなのが集った、それでも結構酔うし、喜びの歓声に満々た祝いをくみ交した。

増田が御礼の言葉とこれからの決意をのべ病身だったので早々と退席した。幹部たちも各部落の人たちも退席し、私の近くの人、友人たちがまだ居残って雑談の後仕末の段階になっていた。その遅夜の出来事。

話題の数々



① 小学生の頃

小学生の頃は先生でも答えられない質問をするので先生が困り、増田一人を教室外の廊下においたこと度々あったとのこと。それでも成績一番だったそうです。

② 中学校中退上京

弘前中学校中途に上京し、大学の教授であり、当時革新運動の先頭にたち日本農民組合全国会長などをつとめた大山郁夫先生の用心棒役傍々新しい学問をしたとのこと、大山先生の奥さん、とても優しく人への面倒見のある人、名は隆子だったので自分の娘に隆子とつけたとのこと。

③ 青年時代

増田の青年時代軍隊の階級初め伍長だった。在郷軍人銃剣術の選手だったし格別背が高いのでよく記憶に残っている。翌年の銃剣術大会には一等兵をつけていた。

おかしい、人違いかとも思ったことがあったが、なぜそうなのか私共小供には解る筈がない。戦後知ったのだが赤い兵隊だったから階級を下げられたんだという。

④ 嘉瀬産業組合に入る

戦前、嘉瀬産業組合が行きづまった頃、当時の組合長高橋竹太郎氏（地主であり村長もやった）あんな若者、案外使いものになるかも知れない。と黒石で消費組合で働いていたのを迎い入れたとの由。

その後組合は新風を起し見違えるように大きくなった。

私が若者になって冬の内職をやりたい、と先輩の蛸島一に案内されたとき、いまの津田孫市宅の家が産業組合事務所であった、初めて会い、縄なり機械をすすめてくれたのが増田氏であった。

⑤ 農民組合運動

敗戦後、私の小屋に農民組合本部の看板をかけておいたら、半ズボン姿の増田氏、ボルネオから帰国して間もなくの頃、私の家に来て「なんどいいことやてらな、これから一緒にやりましょうや」と言って来た。

その後農民組合運動は増田氏中心となり産業組合事務所が本部化した。やがて法律が変わって農業協同組合法が制定されたので、農民組合の役員が発起人を作り組合員加入の署名運動をやり、いまの農業協同組合を創立した。

当時、地主側と見られる一翼も第一農業協同組合を創立し元の産業組合の財産を組合員数によって按分分割して発足したが、第一農協は経営不振により消滅した。

⑥ 若いうちに勉強せ

増田氏はよく勉強に励んだ、病床にありながらも一時も本を離さなかった。

私共は、病気を気づかり、本を見るより病を先に治したら、と要らざるおせっかいかも知れないがよく言ったものだ。

増田氏は逆に私共に「若いうちに勉強せ」、と一言で言ったものだ。

『何を勉強すればよいものか。こんなにたくさん本があるんだもの、どれか貸してくれないか。』というところ

『なんどに貸す本は一冊もないね、私が本を見ているのは誰が何を書いているか批判（ヒバンと言う人だった）的に見ているんだ。』という、当時はそのことも解らなかつた、貸したくないのでそう言ってるのではないか、とも思ったりした。

いまになって見ればそれが本当だった。一通り基礎理論が身についてないと迷わされる本がたくさんあったのだった。

⑦ 増田氏の父がよく言ったものだ。

上京していた頃「千代吉が家に帰ると警察がこなかったか、と聞く」「警察につきまとわれてこわくないか」というと、「千代吉は警察に護衛されているから返って身が安全だちや。となんも苦にしなかつたな」「千代吉は勉強が出来るので何があんでも学校さ仕込むべと思つて、雇売ったり、土方などして一生懸命働いたもんだ」

「千代吉が国賊扱いされ、村の人から家に石をぶつつけられ仲間はずきされたこともあった。」

などなど若い頃のことをボソリボソリと語つたものだ。増田氏の父も体が、ガッチリと固く大きく、どんな加重な仕事にも人一倍出来るような頑健な体格であった。

⑧ 一言結論の増田氏

村会議員選挙の際、農民組合推せんに当って、「組合で推せんした限り絶対に落選させないよう全力を挙げてやるんだよ。」と一言あいさつ。定員十六人のうち十二人推せん全員当選した頃もあった。

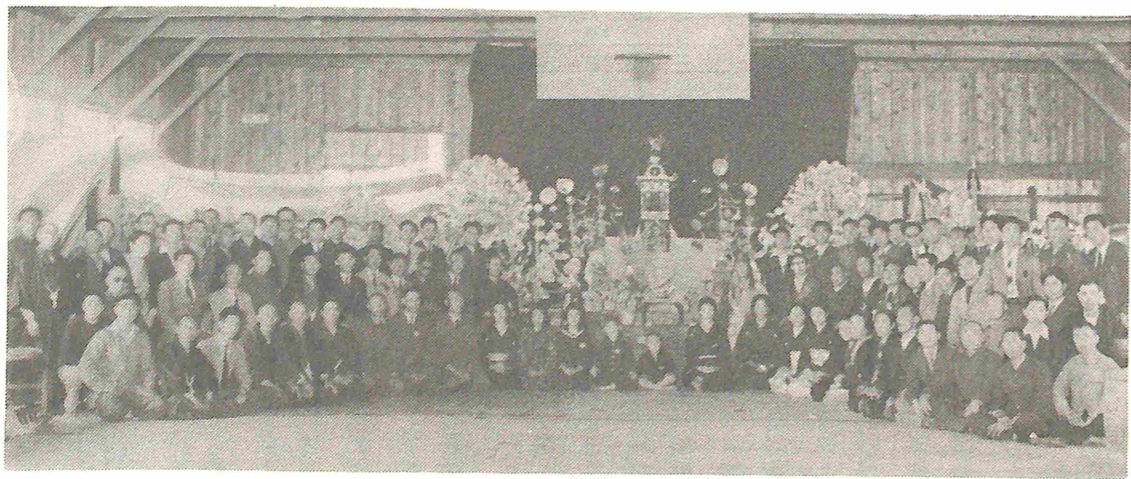
農民組合の会議

をやるにも農協事務所の狭い二階にすし詰め集り、二階が落ちるんじゃないか、と心配したもんだ。

一つの問題を討議するにも、別に議長をたてなかつたが、各人各様にあてもない、こうでもない、と正にけんけんがくがくがやがや論破が暫くつづく。

話しのタネが尽きた頃、増田氏、「こうした方がいいぢやないか」と一言、課題の焦点を示す。

「それがいい」と一言で決論。



(故増田千代吉氏の葬儀 一 於 嘉瀬小学校講堂)

会議はいつもそんな具合で行われたものだ。

⑨ 村長在任中の一言

「村長って儲ける気になれば儲けるによいもんだ、全然予算に出さなくてもよい金が入る場合があるようになってきているもんだ」と、でも増田氏はいつも無一文、公用で歩いても附人に「な、金もってないか」と小使銭出してもらう。あとで返済するが、

その役は大てい内海武七氏であった。見上げるほどの背高男と、ずっと下、ヘソ下に居るような小男と二人並んで歩くのだから何処に行っても特に目だち話題にのぼるコンビであった。

大沢久明氏、島口重次郎氏、津川武一氏、よく訪ねて来たものだ。塩崎要祐もたまに訪ねて来て、社会党から労農党結成への相談話しにも来た。

増田氏は、もう潮どきでないか。この辺で中間政党でなしに共産党に入党する時期ではないか、との意見を出していた。

その後、大沢久明氏を先頭に県内の社会党員が大量に共産党に入り社共合同の形で青森で合同祝賀会を挙行した。

嘉瀬にも共産党が誕生した。昭和二十四年遅秋の頃であった。

⑩ 移り変わり

増田氏の死後、村の先進解放者。農業協同組合の創始者。発展功労者として銅像を建てよう、との声が大分あった頃もあったが実現せず、今日に至ってしまった。

それらのことが忘れ去られるか、全く知らない、又関心のない人たちがばかりになってゆく世代になりつつあるように思われる。

闘病



増田氏の病気は肺結核と糖尿病、一方では栄養をとらねばならず、一方では栄養をとってはならない、非常にむずかしい病態であった。

敗戦直後のことあらゆる物資が不足な時代、結核によく利くストレプトマイシン、これはアメリカからの輸入薬、手に入れるのが極めて困難であった。

知人の医者や同志を頼って探し求めた。高価ではあったが、この走り役は山中栄造だった。

増田氏は大東亜戦争がたけなわになるにつれて官憲当局から厳しく監視された。愈々矢がたてられた。監獄に入るか外地に宣撫班として赴くか、二つに一つの道を強要された。

増田氏は外地にゆく決意をした。そして車力の岩淵謙次郎（戦後社会党県議となった）と共にボルネオに行った。

いわば昔のことばで言えば国外追放、島流しの身となるがその道を選んだ。

そしてその地で体をこわし、あの頑健な体躯も、ポロポロの病状身となって敗戦後帰国したのだった。

農民運動の先駆者

原田万治

増田さんの想い出としてはたった一度しか見たことがない。会ったのではなく見たということは嘉瀬村長として、中学校へ何かの式典の祝辞を述べに来た時だけである。

とに角上背が高く、顔は浅黒く日本人離れた何か強面の容貌であったと記憶している。

昨年の八月下旬、木村会長さんと二人で増田さんの妻キクさんに、生前の増田千代吉さんのお話を伺うにお邪魔にাগり、聞くところによると身長は六尺三分（一八二・七cm）で現代でも特別大きい方に属するほどの外見は偉丈夫であったという。

明治四十三年嘉瀬村大字長富鎧石一三七番戸増田兵吉の長男に生まれ、小学校時代は頭能優秀にして神童といわれるほどの明晰な頭能の持主であった。小学校卒業と同時に先生方の強力な推挙により県立弘前中学校に合格したが、小作人の小せがれが（図体は大きかったろうが）片田舎の村から、弘前中学校に入学することは学業成績は別として、経済的に全く余裕のない家庭に於ては大変であったろう。

父兵吉はその為とは言い難いが樺太に出稼ぎを余儀なくされ、学業資金を送金したという。

増田さんが、社会の仕組における矛盾を会得するのは弘中時代で、大正デモクラシーの花咲く時代に進歩的な教師陣に薫陶を受け、卒業後大山郁夫氏に師事し三年位書生生活を送ったという。

そこで階級社会の理論を身につけ、帰郷後は黒石地区を中心に農民運動に没頭し、昭和五年以降スパイの嫌疑で拘束され三年間牢獄に繋がる身になった。

反体制の動きに対して予防拘禁法とかで、いろいろな弾圧を加えられ、自由のない暗い世の中に入るわけでありますが、増田さんも出獄後は思うように運動ができず、昭和十五年嘉瀬村産業組合の専務として勤務につき、百姓の所得向上、並びに組合の経営改善に尽力したといわれる。

ところで反体制運動を実践する男達が家族生活において、天皇制的家父長そのものである時、社会的受難に加え、家父長制受難にさらされる家族は、如何に理解しようとしてもやり場のない嫌悪感を感じ取ったであらう。

増田さんは家父長制そのものを踏襲したとは思われないが、産組の専務時代明日に口に糊する米もなくキクさんが相談をかけると、それはお前の領分だ、家庭のことはお前にまかせから、無ければないで私がホイド袋を提げてもいいからと実に楽天的な考えであったという。

産業組合では特に力を入れたのは薬工品で村民の所得が少しでも上向き、暮らしに役立つようにと努力したのである。

しかし薬工品そのものは戦争遂行の軍需物資の地位にあり、同志の人達からは侵略戦争の協力者だと非難されたそうですが、彼特有の座談的弁舌により同志の非難を撥ね返すが一度、反体制のレッテルを貼られると官憲は許すことなく、受難の歴史は続くのである。